

# 学習者の「読みの構え」を育成する国語科授業 －〈死〉について考える－

井上 泰

テキストの「読み」の対象を、テキストの問いかけ（問題領域）とテキストの呼びかけ（見方・考え方）とに区分する「構え」を身につけさせることを狙いとする国語科授業においては、学習者のテキストの呼びかけへの「応答」が問題となる。本稿では、「問題領域」を〈死〉と設定して行った、本年度高校1年生、国語総合（現代文）の授業において、学習者がいかにテキストの呼びかけに「応答」したのかを報告する。

## 1. はじめに

国語科教育における「問題領域」を問題とする授業の前提は、「読み」の対象を二つに区分するところにある。すなわち、

I：問題領域（テキストの問いかけ）

II：見方・考え方（テキストの呼びかけ）

である。本稿では、学習者にこの二つを区分する「構え」を身につけさせることを「読みの構え」と呼んでいる。「読みの構え」を育成するための学習には二つのタイプがある<sup>\*1</sup>。本稿では、教師が設定したテキストの開く「問題領域」について学習者がテキストの呼びかけに「応答」しながら問い深めるというタイプの授業実践を報告する。

このタイプの授業では、学習者のテキストへの「応答」が問題となる。学習者のテキストへの「応答」とは、単に学習者がテキストの呼びかけを「教える」のではなく、テキストの呼びかけに対して学習者が「批評」や「評価」をして、テキストの呼びかけを吟味することをいう<sup>\*2</sup>。本単元では、テキストの呼びかけを読み取ったあとで、学習者にテキストの呼びかけに対して「批評」文を書くという方法で、テキストの呼びかけに「応答」させた。

報告するのは、2010年度高校1年生 202名に対しておこなった国語総合（現代文）の授業である。学習者がいかにテキストの呼びかけに「応答」しながら「問題領域」を問い深めていったのかを報告したい。

## 2. 単元構想

### （1）〈死〉という「問題領域」について

本単元では〈死〉を「問題領域」とした。〈死〉は人間にとって重大なテーマである。人間は〈死〉についてさまざまに議論し答えを出してきた<sup>\*3</sup>。ただ、本単元ではそういった〈死〉についての思索のすべてを学習者に提示しない。本単元では「わたしの〈死〉」について考

えさせたい。もちろん、「わたし」は「わたしの〈死〉」を経験できない。したがって、明確な答えが出る問題ではない。しかし、「わたしの〈死〉」について考える意義は十分にあると思われる。マルティン・ハイデッガーは人間を「死へ臨む存在」ととらえ、その「存在」が抱える「不安」や自己自身から発せられる「良心の声」によって、「世間」に紛れている自己を自己自身へと連れもどすことを説いた<sup>\*4</sup>。つまり、「わたしの〈死〉」を考えることは、「わたし」を「死へ臨む存在」ととらえ、その地点から「わたしの〈生〉」を照射し、よりよく生きることを模索させるのである。

「わたしの〈死〉」について考えることは「わたしの〈生〉」について考えることである。そういった意味で、本単元の「問題領域」を設定した。

### （2）学習前の学習者の〈死〉への認識

学習者は〈死〉についてどのように思索をしたことがあるのだろうか。本年度中学校3年生が夏休みに書いた読書感想文には、〈死〉をテーマにしたものがある。

この本で私は、改めて“死”についてを考えさせられた。雁子が私と同年という事もあり、共感できる事も多く、その分、“死”に対する恐怖や悲しみをよりリアルに感じる事ができた。私も今後きっと“死”に出会う時が来るだろう。その時、もう一度この物語を読んで、自分の気持ちと雁子の気持ちを比べてみようと思う。（傍線は引用者。以下引用文に傍線がある場合は同じ）

本生徒が読んだ物語は、〈死〉への実感のない主人公雁子が「おじいちゃん」の〈死〉の意味を徐々に理解していくというもの。傍線部にみられるように、本生徒は雁子に自身を重ねながら、いつかくる「大切な人の〈死〉」（二人称の死）について考えている。この例だけでなく、読書感想文のテーマとして「大切な人の〈死〉」をとりあげたものは散見される。このことから、学習者の多く

は「大切な人の〈死〉」については考えたことがあると推察して、単元を構想した。

### (3) テキストについて

「わたしの〈死〉」について考えるために次のテキストを選んだ。本授業は国語総合(現代文)であるが、「問題領域」を問い深めるために古文ももちいた。

①スウィフト『ガリヴァー旅行記』第三篇「ラグナグ渡航記」…〈死〉を「人間に必ずつきまとうあの禍」とらえていた「私」が、歳を重ねるごとに強欲になっていく「不死人間」を目の当たりにして、「不死」を望まなくなる物語。

②薄井ゆうじ「蠍座カレンダー」…主人公の「ぼく」が毒蠍に刺されたのをきっかけにして「人はみんな生まれた瞬間に蠍に刺され」ていることに気づき、〈死〉を受け入れる物語。

③吉田兼好『徒然草』155段…〈死〉を「かねて後に迫っているもの」とらえ、「必ず果し遂げんと思はん事は、機嫌をいふべからず」と説く。兼好の〈死生〉観がよくあらわれている章段。ハイデッガーの思想と重なる点が多くある。

①では学習者の「問題領域」への感触を確かめることと〈死〉を人間の条件とするテキストの呼びかけに学習者がどのように「応答」するのかをみることを狙いとする。②では〈死〉を内包した存在として人間をみるテキストの呼びかけへの学習者の「応答」をみる。③では、〈死〉をつねに切迫したものとしてとらえ、そこから〈生〉のあり方を問うテキストの呼びかけへの学習者の「応答」をみる。

以上のようにテキストを選んだ。しかし、実際の授業では②を『竹取物語』に変更した。その理由は次で詳しく述べる。

## 3. 「人間の条件としての〈死〉」と学習者 — 『ガリヴァー旅行記』

本テキストでは読解後学習者にテキストの呼びかけを考えさせた。学習者が読みとったテキストの呼びかけは次のようなものであった。

○この物語は、死が訪れないということは幸せといえるのかを問いかけていると思う。(中略)死は怖いけれど、その時まではどう生きるかが大切なのではないかと思った。

○不死というのは、昔から人間にとっての、ある種の憧れともいえる。けれど、不死になってしまった後、どうなるんだ、ということだと思ふ。年をとらないのなら体力も記憶も健在だろうが、生きている以上そうはいかない。人間は七十歳やそこらで物を忘れ

てしまうのだから、二百年や、もっと生きていても何が楽しめるだろう。不死とは言いかえれば死ねない、ということになる。例えどんな辛い状況にいても、もう死にたいと思うほどの状況でさえ、死ぬことだけは許されない。死も恐ろしいものかもしれないが、不死もそれと同じくらい、それ以上恐ろしいことかもしれない。果たしてそれでも不死を夢見るだろうか。それよりは、悲惨な無限を生きていくより、有限を大切にしたいと望んだ方が、どれだけ賢明なことか、ということだと考えた。

このテキストの呼びかけへの学習者の「応答」は、4パターンにわかれる。

①テキストの呼びかけに賛成。

②テキストの呼びかけに賛成した上で自分の〈死生〉観を問い直す。

③テキストの呼びかけを了解した上で問題点を提示。

④物語の「不老不死」という設定を批判する。

①テキストの呼びかけに賛成するもの。

○僕はこの物語の呼びかけには基本的には賛成だ。「不死」と聞いて、「幸福・不老」という方に無意識に思ってしまう。しかし、この物語を読んで、この考え方は間違っていたと思なおされた。生きていく上で、死というのは必ずつきまとうものだ。言いかえると人生は有限なのだ。だからこそ生きている間をどう過ごすのか。これがどうやって死を遠ざけるかということよりも、大切なことなのではないだろうか。

②は、テキストの呼びかけに賛成した上で自分の〈死生〉観を問い直すもの。

○「物語の呼びかけ」について私は賛成だ。人は、「死ぬ」ということがよくわからないこそ、死を恐れていると思う。だから宗教などで死後の世界のことを考え、救いを求めようとするのだが、では、私たちは「生きる」ということをよく理解しているのだろうか？明日のことやずーっと先の未来のことを予知できる人なんていないのに、生きているということを「死ぬ」ことよりも安心だとすることがまずできないのではないかと？そう考えると結局「死」も「不死」も怖いものだと思う。だからこそ、今の自分の〈死生〉観を見つめなおしたほうがいいのでは…？という物語の呼びかけにとっても共感できたし、自分はどうなのだろうか…と考えるきっかけになった。

○「不死を望むより今を大切に」、というのはなかなか積極的な「死」に対する見解であると思ふし、そうならば良いと思ふ。だがやはり難しいのでは、と思わざるを得ない。何を言っただって、「死」を恐れる気持ちはわずかなりとも心の内にあるものだし

(全く無い人などこの世に何人いるだろうか?)、そもそも「今を大切に」生きるとはどういうことだろうか?「今を大切に生きる」とはどういうことか、具体的に提示してみれば、それが案外に易しいことか、難しいのか分かるのかもしれない。

③は、テキストの呼びかけに賛成した上でテキストの呼びかけでは解決できない問題について述べている。

○死なないことが必ずしも良いことではないということはあると思う。だが、死ぬことがいいこととも限らない。今は、死ぬことをあんまり気にせずにいる。だから、生きることを求めようとしない。でも、死を目の前にすると、生きたいと思うのだろう。テレビなどで病気で死にそうな人が生きたいと言っているのを見たことがある。人は死にそうなきはそう思うのだろう。そんなときはやっぱり不死を求めるのだろうと思う。人間は自分と死との関係によって、死や生によっての考え方が違い、そして変わっていくのだと思う。だから、死=悪ではなく、死=良でもないと思う。

④は、物語の設定が「不老不死」ではなく「不死」であったため、「不老不死」ならば「私」はそれを望むのではないかという批判。

○呼びかけには納得できるし、そうしたいとも思う。しかし、根本的な話、ガリヴァー=人間は「不死」を望んでいるのではなく、「不老不死」を望んでいるのであって、だからこそ夢であるのだとも思う。逆に、不老不死人間がいたら?という視点でかかれていれば、もっと説得力はあったと思う。この物語では死ぬことは有るべきことだが、老いというものは、マイナスのイメージでしかない。

①にみられるように、多くの学習者はテキストの呼びかけに賛成している。しかし、③のように〈死〉が自分に迫っている場合や大切な人が〈死〉に瀕している場合には、〈死〉は人間にとって重要なものだと考えられないという批判も述べられる。理念としての〈死〉ではなく、現実的な〈死〉について考える場合には、この点は重要なポイントだろう。

興味深いのは②である。②は、テキストの呼びかけに賛成しながらも、賛成している自身の見方・考え方を問い直している。おそらく、学習者にとって〈死〉や〈生〉は、簡単に了解することのできない、重大なテーマなのだろう。そのことは次の「応答」からもうかがえる。

○“死”や“生”は全ての生物、特に人間には例外なく降り注ぐ、おもしろいテーマだと思う。簡単な言葉でまとめて終わらせてしまうのではなく、難しいテーマだからこそもっとじっくり考えるとおもしろいと思う。そういう意味でかなり賛成。

○不死も(引用者注、社会的に)死なら、不死人間であろうかあるまいが最後は死ぬが、苦しむ時間は圧倒的に不死人間の方が長いし、つらい。有限な時間を、有意義にすごすのは共感できるが、何百年も苦しむより死ぬ方がいいってのは納得できない。いや、そうかもしれないし、そうだと思うが、なんか「死」が軽い感じがする。不死がよいものではないというのはそうだと思うが、多分実際に不死人間はいないから不死の恐さは想像以上のものだし、死への恐さだって想像による部分があるのに、不死と死を安易に比べることができないと思う。

本テキストでは、学習者が「問題領域」をどのように受け取るか、その感触を確かめることが狙いの一つであったが、その「応答」からは学習者にとって〈死〉や〈生〉が、簡単に了解することのできない、重大なテーマであることがわかった。

また、④にあるように「不死」という物語の設定への批判がなされた。そこで、次時は「蠍座カレンダー」を読むのではなく『竹取物語』のかぐや姫昇天後の場面を読んで「不老不死」の問題について考えることにした。

#### 4. 「他者と共にあるわたしの〈生〉」と学習者—『竹取物語』

かぐや姫が昇天したあと、翁と嫗は「なにせむにか命も惜しからむ。誰がためにか。何事も用もなし」と言い、また帝は「あふこともなみだにうかぶ我が身には死なぬ薬も何にかはせむ」と歌を詠んで、かぐや姫の残した「不死の薬」を飲まない。翁と嫗、帝はかぐや姫と共に生きることに〈生〉の意味を見出し、かぐや姫不在の〈生〉を拒否するのである。この「不死の薬」は神仙思想のシンボルと考えられるため、授業では「不老不死」の薬として教えた<sup>\*5</sup>。

テキストの呼びかけへの学習者の反応は次の通り。

①テキストの呼びかけに賛成。

②テキストの呼びかけに反対。

①は、テキストの呼びかけに賛成のもの。主なものをみていく。

○まわりの人が全員、不老不死なら良いけど、自分の生きるべき時代を、周りの人々と生きていくことに意味があると思う。

○私はやはり「不老不死」は望まない、と思う。人に間と書いて人間というように、たくさんの人たちの間において、関わっていくことが、人間として「生きる」ことだと思うし、生物として「生きる」ことをしてもムダだと思う。

○他人がいるから〈自分〉がいて、そして生きている。

人それぞれ生きる意味は違うが、やはり「人とかかわり」無しで生きていくことはできないと思う。

○誰ともふれ合うことのなく孤独に生きていくことが死よりもおそろしい。

多くの学習者は、『竹取物語』の他者と生きることにこそ〈生〉の意味があるという呼びかけに賛成している。また、他者と共に生きるという観点で次のような意見もあった。

○自分のみが「不老不死」というのは「不死」と同じように苦しいものだと思う。愛する人は老いていき死んでいくのに、自分は老いることもなく死ぬこともない。愛する人が死んでゆくことが自分とはまったく無関係な世界でおこっているようで不思議な気持ちになるだろう。愛する人が死んでも、自分は生きなければならない。人は一人では生きていけないので、新しい大切な人というのができていく。しかし、その人も死んでいく。そのくり返しで、何人の人の「死」を見なければならないのだろうか。

このように学習者は「不老不死」という問題を他者と共にある〈生〉という観点から考え、答えを出した。ただ、テキストの呼びかけに反対する意見も僅かだが出された。

○翁と姫、そして帝は「生きる意味」を見失うほど落ち込んでいるが、いつまでもその状態が続くとは思えない。実際、3人がかぐや姫と出会う前でも「生きる意味」というのはもっていたはずであるから、もし薬を飲んでいれば、また新たな「生きる意味」が見出せていたと思う。だから不老不死は魅力的なことに思える。

このような意見について授業では時間をとってあつかわなかったが、「生きる意味を何に見いだすか」といった点で学習者に考えさせることによって、「わたしの〈生〉」についての思索を深めていくことができるだろう。

## 5. 「〈死〉へ臨む存在」と学習者

### — 『徒然草』155段

テキストの呼びかけへの学習者の「応答」は次の通り。

① 〈死〉についての呼びかけに賛成。

② 〈生〉へのまなざしに賛成。

①は、テキストの〈死〉についての呼びかけに賛成するもの。

○兼好の〈死生〉観には、少し怖いものを感じたが、有無を言わず納得できる。「死と隣り合わせ」という言葉を聞くことが多々あるが、たいていの人、それでも日々の生活で、十分注意していれば、事故

に遭うことはないだろうし、重病にもかからないだろうと思っていることと思う。しかし、「だろう」というのはあいまいな表現で、裏を返せば、「起こり得る」なのだ。私はそういう意味での「だろう」には恐怖さえ感じる。

○死はいつやって来るのか誰にもわからない、よって生の期限は知ることができない、というのは正論だと思う。「余命」というものはあるけど、実際その何倍も生きたり、その逆だったりして、いつ死がやってくると、予測することはできない。だからこそ、いつ終るのか分からない貴重な時間を大切にしないといけないのだと思った。

○兼好の「死」がいつの間にか後ろに迫っているという考えに賛成。死が前だけにあるならば、人は、運命というもので死んでしまうことになるのだろうが、後ろからも来ることによって「突然の死」があるのだろうと思う。「突然死」というものがなければ、人が「死」を恐れることも、「生」を大切にすることもなくなってしまわないか。

②は、兼好の〈生〉へのまなざしに賛成するもの。

○確かに世間一般の人々はそれほどまでに死を考えずに生きていると思う。しかし、死の恐怖と戦う人や死を目前にしてやりたいことをやっている人もいる。死にきづかないことよりも、気づいている方が良いなと思った。

○私は兼好の〈死生〉観に賛成だ。私たち人間に「絶対」はあり得ないのだから、人はいつ死ぬかわからない。いつでも、死と生は隣り合っていて、死があるから生があるし、生があるから死がある。だから、兼好の「死は前ばかりから来るのではなくて気がついたときには後ろに迫っている」という言い回しはすごく的を得ていて、わかりやすいなと思った。そしてガリヴァー旅行記の話にもつながるが、そういう危機感があるからこそ、人生を有意義にすごすことができるのだと改めて思った。

○兼好は死はいつ訪れるか分からず、しかもとても早いと言っている。沖の干潟の例をあげるとすれば、潮が満ちるまでにいかに多くの貝を掘るかということに訴えていると思う。つまり、いつくるか分からない死までどう生きるべきかということ。

『徒然草』の呼びかけは多くの学習者に実感をもって響いたようである。人間を「死に臨む存在」として考え、その地点から〈生〉を見つめなおす、そういったことがテキストの「応答」としてみられた。そこで、次に「わたしの〈生〉」を問題化するために、学習者が自身の〈生〉のあり方をどのように考えているかを問うた。

## 6. 「応答」への「応答」—学習者の〈生〉についての思索

5でみたテキストの呼びかけへの「批評」文（「応答」）をふまえて、学習者に「自身の〈生〉についてどう考えているか」という問いを与えて文章（「応答」）を書かせた。多くの意見が出されたが、主なものをまとめると次のようになる。

- ①未来のための現在の〈生〉
- ②存在することの不思議
- ③時代や社会に影響されながらある〈生〉
- ④他者との関係における自己の〈生〉

①は、現在の自分の〈生〉のあり方に疑問をもちつつも、未来のために今の〈生〉があるととらえているもの。

○ガリヴァーや兼好が言ったように「人生には死という限りがある」「必ずやりたいことはやるべき」という意見には、私も賛成である。人生は有限だから出来ることは限られているし、時間を無駄には使いたくない。

しかし私はいつもここで、時間を無駄に使うとはどういうことだろう？と思う。この考えが始まると、今自分がしていることのほとんど全てが意味の無いことに思えてしまう。また、「あの時こうしていたら、今は違ったのかな？」と、時間が過ぎることが可能性をつぶす行為のように思えてくる。この思想こそ、時間を無駄に使っているのではないだろうか。

だから私は時間を無駄に使うことについて考えるとは時間の有効な使い方について考える、つまり自分がこう生きたときの未来の姿、さらに言えば将来について考えることではないかと思う。少し論点がずれている気もしなくもないが、こっちの方が前向きだし、少しはマシでないだろうか。未来のためだと思ったら、現在も頑張れる。

②は、自分の「存在」の不思議について述べているもの。

○私は〈生〉はすごいものだと思う。たまに、自分はなんで生まれたのかとか、今どうやって生きているのか、親が違う人をそれぞれ選んでいたら、どうなっていたのか、など全く想像できないし、考えるほどとてつもなく複雑なことだと思って、一人で感動することがある。今、自分がここにいることはすごいなああと一人で思うことがある。

また、一人で回想することが色々ある。（中略）高校に入って「もう3年もすれば大学生かあ。大学を卒業したら就職しないといけないなあ。仕事始めれば、あっという間に大人を通り越して年をとっていくじゃん。人生って短いもんだなあ。だったら今

から、やらなければならないことも、自分のやりたいことも、精一杯やって楽しまないと。死ぬ間際になって後悔しないようにと。」と、深く考えることが多くなった。〈生〉は一人一人に一度つきりしかないから大切にしないといけないと思う。その一度つきりっていうのも〈生〉の不思議ですごく、大事なところだと思う。

③は、時代や社会に影響されながら存在している自分の〈生〉について述べているもの。

○（引用者注、人間は）どうしても社会の上で〈生〉を生きなければならない。しかしそのある意味自分が縛られている社会、世界は自分自身ともいえるような、世界の中心は俺だと言えるような気がします。なぜなら自分の死は自分の意識している世界の終わりだからです。だったら、そんな社会に振り回されて生きるのは何かばからしい。楽しんで生きようという気になります。

④は、他者との関係のなかで自己の〈生〉をみつめているもの。

○〈生〉とは自分だけのものではあり得ないはずだ。自分の〈生〉は、属する様々な社会のワクから出ることはできないし、逆に社会とは個々の〈生〉の集まりでもあると思う。例えば、我々は普段言い方は悪いがこの学校というワクの中で〈生きて〉いる。だが、「この学校」というコミュニティーは中に我々の活動によってその形を持つ。そして、もっと大きく考えることもできる。この小さなコミュニティーから、限りなく多くの〈生〉につながっていく。生徒の家族、友人、体育館の修理をされている方から、かつてこの校舎を建てた人から…それぞれの〈生〉に関わる全ての人をつないでいけば、おそらく世界中の〈生〉がリンクすると思う。

だから、〈生〉とは自分だけのものではなく全ての〈生〉が関わって存在していると思う。その人自身がどう思うかに関わらず、この関わりの中で全く意味のない〈生〉などないと思う。

誰かの〈生〉と相互に関わりつつこの社会の一部であること、〈生〉の意味なんてそれで十分だろう。

○人は自分のために生きているが、他人によって生かされているんだと思う。同様に他人は自分によって生かされている。もし、今私が生滅したら、他の誰かも消えるかもしれない。私たちは、必ず生きなければならないわけではないわけではない。でも、死んじやいけないんだと思う。

昨日、新聞で中国には戸籍のない子どもがたくさんいるという記事を読んだ。一人っ子政策で、2人目の子どもを産むと罰金を支払わなければならない

から、一人っ子政策がなくなるまで、二人目の子どもは、戸籍がもらえなくなるという。もし、戸籍のないまま大人になった時、その子どもは戸籍のない不自由を必ず受け入れなければならないだろう。社会の中で、〈生〉がないことが不幸で、〈存在〉＝〈生〉が最初からなければ良かったと、親を憎むかもしれない。でも、親は、その子どもを希望として生きたのかもしれない。

〈生〉が作り出す相互作用が、今の社会を作り出しているんだと思う。

学習者の〈生〉についての思索を読んで気づくことは、学習者が〈生〉について様々に、そして深く考えているということである。そのなかで問題に思うのが①と③である。学習者①は、自己の〈生〉を未来のためにあると考えて現在の自分が抱えている問題に目をふさいでおろし、学習者②は、自己の〈生〉が社会との関係のなかで拘束されていると考えている。授業では、これ以上〈生〉について考える時間がもてなかったが、〈生〉という「問題領域」は、学習者にとって〈死〉という「問題領域」と同じかそれ以上に喫緊の重大なテーマである。

## 7. おわりに

教師が設定したテキストの開く「問題領域」について学習者がテキストの呼びかけに「応答」しながら問い深めるといったタイプの授業においては、学習者の「応答」が問題となる。みてきたようにテキストの呼びかけに「応答」することによって、学習者は自身の見方・考え方を問題としたり、テキストの呼びかけを批判して新たな問いを立てて「問題領域」を問い深めたりする。また、「批評」文（「応答」）に「応答」させることによって新しい問題について考えることもできる。

また、単元の最後に学習のまとめとして書かせた文章に次のようなものがあつた。

○これまで学習したり、他の人の意見を読んで思ったのは、「人間って面白いな」という事である。少し話がずれるかもしれないが、兼好やスウィフトと私達、時代は変わってもみんな〈死生〉について考えている。一人一人違う考えを持っていて、みんな答えを探し続けている。でも実際、その答えは誰も教えてくれない。正解もない。そんなゴールもない問いを人間ははるか昔から考え続けている。一見、馬鹿らしいようにも思えるが、私はそこが面白い所であり、また好きな所でもある。〈死生〉について考えるという事は、今を生きている証拠である。一生懸命だから先の事も、自分の終わりも、世界の終わりも考えることができる。〈死〉って何？ 〈生〉っ

て何？これを問うのを止めてしまったら、果たして人間は今のように生きられるだろうか？よく考えると、すべての事はここに行きつくのではないだろうか。〈生〉を充実させたいから技術が発達する、〈死〉を遠ざける為に色んな対策をたてる。そう考えると、みんなが考えるのを止めてしまったら世界は成り立たない気がする。だからこそ私はこのゴールのない問題を考え続ける人間が好きだし、私も考え続けたい。

テキストの問いかけを自分の、人間の「問い」としてひきうける、そういった効果もテキストの呼びかけに「応答」させるタイプの授業にはある。

以上みてきたように、テキストの呼びかけを知識として「教える」のではなく、「批評」したり「評価」したりして吟味することによって、学習に広がりや深みをもたせることができる。

### 【注】

- \*1 「読みの構え」を育成する授業のタイプと「読みの構え」を育成するための課題については、拙稿「国語科授業における学習者の読みの構えの育成」（『広島大学附属福山中・高等学校 中等教育研究紀要』第50巻、2010）で詳しく述べた。
- \*2 テキストを「批評」、「評価」する学習は、新学習指導要領において新たに加えられた内容である。「新学習指導要領」「国語総合」「2内容」「C読むこと」には次のようにある。  
エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。
- \*3 古代ギリシアから現代までの〈死〉についての議論をまとめたものとして、河野勝彦『死と唯物論』（青木書店、2002）、V・ジャンケレヴッチ、中沢紀雄訳『死』（みすず書房、1978）がある。
- \*4 マルティン・ハイデッガー『存在と時間（下）』（細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994）を参照した。
- \*5 不死の薬については、新編日本古典文学大系『竹取物語』の校注に次のようにある。（74頁）  
『宇津保物語』初秋巻には、「蓬莱の山へ不死薬とりに」とある。神仙思想のシンボルだったわけである。

### ○参考文献

- マルティン・ハイデッガー『存在と時間（下）』（細谷貞雄訳、ちくま学芸文庫、1994）
- テキスト本文  
岩波文庫…『ガリヴァー旅行記』  
新編日本古典文学大系…『竹取物語』、『徒然草』